

パーム油学習会第8弾「たっぷりボルネオ島の現地報告」の報告

10月9日(月)に「とよなか国際交流センター」で「たっぷりボルネオ島の現地報告」をパーム油学習会第8弾として実施しました。この催しは、毎日新聞の大阪版で紹介していただいたこともあり、学生さんから年配のかたまで21名の参加で、参加者からの質問やご意見も多数いただいて、大変盛り上がった学習会となりました。

ウータン・森と生活を考える会では8月下旬から、何名かのメンバーがボルネオ島を訪れ、現地の最新の動きを持ち帰ってくれています。そこで、是非多くの皆様にもお伝えしたいと思い、この学習会を企画しました。

特別アドバイザーの神前は、中央カリマンタン州のメガライズプロジェクト跡地を訪問し、泥炭地の回復と森林火災防止に取り組む先進地域の報告をしてくれました。(この報告の内容は、会報誌126号のp4～p7にもあります。)

事務局長の石崎は深い泥炭層がありオランウータンが多数棲んでいるにもかかわらず、木材会社による開発の危機にさらされているスンガイ・プトリ地区(西カリマンタン州)にかかわる現地のNGOや住民の動きを報告してくれました。(この内容は会報誌126号のp8～p11と本号のp～pにもあります。)

若手の近藤(Missy)は、従来からウータン・森と生活を考える会がかかわり、FNPFの活動地であるタンジュン・プティン国立公園地域で、いままで手のつけられていなかった地域での植林の新しい試みであるスポット植林について報告してくれました。(この内容も本号のp～pにあります。)

会場から質問や意見もたくさん出ましたが、そのうち1つだけ紹介しておきます。(質問と回答は米澤がまとめています。)

Q 食糧問題を考えるとどんどん人口が増えたら、もっと食糧増産のために土地を使わなければならないと思うが、アブラヤシの問題では、カリマンタン島で一杯になって、カリマンタン島では作れないから、他の地域に企業が出て行って作り出しているということ、世界全体の環境の問題として考えたときどのように考えればいいのでしょうか。

石崎事務局長の回答：インドネシアのNGOの人が言っているのは、パーム油自体を否定しないけれど、もう十分な面積があるので、これ以上必要ないという意見が多いです。ウータンでこの間、学習会で呼んだ平賀緑さんの話によると、そもそも人口が増えて油の需要が多くなるということ自体に疑念を感じていて、そんなにそもそも油を使っていたかという、以前はそんなに使われていなかったことを考えると、需要自体が企業や政府が無理矢理つくったものではないのかということ、私もだいたいそのように思います。

神前特別アドバイザーの回答：食糧問題からするとアブラヤシの生産性は高いが、今以上にどれだけ新しいアブラヤシ農園を開かなければいけないのかというところかなり疑問で、たとえばインドネシアの場合も、生産面積の4割を小規模農家が占めていますが、この小規模農家の生産性が低いので、新しい品種とか栽培技術を導入すれば、インドネシアだけでも生産量をかなり上げられると思います。新規に泥炭地や原生林を開かないで、今のアブラヤシ農園の生産性をできるだけ高めて使っていけばよいと思います。

パーム油は安くできるので、最貧層まで手に入りやすいことが需要の拡大を支えていると思います。先進国の消費は2割～3割程度で、7割以上が途上国、インド、中国などです。

アグリビジネスも巨大な利益をあげている一方、小農で自分の畑でアブラヤシをつくっている人も、2haぐらいつくると左うちわで暮らせるので、小農もあいている土地があれば、どんどんアブラヤシを植えたいという状況が世界中に広がっており、それを止めるのはなかなか難しい。

インドネシアやマレーシア以外の途上国では熱帯の原生林や泥炭地の開発に対する歯止めが全くない状態で、どんどんプランテーションをつくるという動きが広まっているのは確かです。地球規模で考えると、むしろこれからはアフリカとか南米で無秩序なアブラヤシ農園の拡大が起きつつあり、そこをきちっと監視して、止めていくことの意義は大きいと思います。(米澤)